

巻頭言

生活の中の科学的思考

北海道千歳リハビリテーション大学健康科学部

リハビリテーション学科作業療法学専攻

専攻長 佐々木 努

ここ数年、子どもと関わる時間が多い。その傍ら、細々とではあるが研究活動を行っている手前、子どもの“思考”について考えることも多い。先日、子どもが段ボールを使って任天堂 switch を作り始めていた。我が家にはゲームがないので、自分で作ってみようと思ったのだろう。それはさておき、その経過を眺めていると、取り外せるコントローラーの作成に苦戦しているようであった。セロテープで付けてみるが、一度つけるとかなり外すことが難しくなる。付箋を使ってみるがいまいち付きが弱くうまくいかない。画鋏を使って付けてはみたものの、指に刺さって痛いらしい。最終的に、磁石を紙の部分に取り付け取り外しができるように完成させていた。所要時間は2時間くらいだっただろうか。

目標を定め、仮説を立て検証、失敗したら原因を考え、解決策を立てまた検証。この繰り返しを行っていた。誰もこの“思考”過程は教えていないにも関わらずである。私たちが行う研究プロセスと酷似しており、なおかつ生活に直結している。

本誌にも複数の論文が掲載されている。研究内容の吟味はもちろん楽しいのだが、著者の思考過程を本文だけではなく行間からも読み取ろうとすると一層論文も面白い読み物になると思う。是非楽しんで読んでいただきたい。